

2023. 4. 2. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書19章11～27節
『与えと取り上げ』

本日の聖書の箇所には「ムナ」のたとえという小標題が掲げられています。このたとえ話には少なくとも二つのテーマがあります。

一つ目は「神の国はすぐにも現れるもの」(11)と誤解していた人々が多かったという事実に対してです。神の国、つまり裁きの時の到来が早ければ早いほど、人々は刹那的に生きることを求めてしまいます。ルカはそういった考え方に対して批判的に「遠い国」(12)という言葉によって終末遅延問題に解答しています。

二つ目は弟子たちへのいましめです。イエスの再来まで、彼らが委ねられた任務を忠実に果たすようにとの教えなのです。また、先週のザアカイの物語でも話したように、富の使い方の問題でもあるのです。

この記事はマタイ25;14-30にも掲載されていますが、内容的には相違がたくさんあります。ルカはマタイによる福音書を読んだことがありませんから、おそらく別資料を用いたものと考えられます。

さらに、ルカは当時の政治史を記事に反映させるという特徴を持っています。ここではヘロデ王の死後、息子のアルケラオスが王にならないようユダヤ人から訴えられていたという歴史が色濃く背景に組み込まれています。このアルケラオスはローマで皇帝からユダヤの王を拝命して、帰国後に反対者を虐殺しています。

さて、物語の「ムナ」というのは100ドラクメ、当時の労働者3ヶ月分の生活費に相当します。これを10人に元金として与えたといいます。王が帰還

した時、僕の中には10倍、5倍と富を増やして報償を得た者もありました。これは「ごく小さな事に忠実」(17)であったと評価が加えられます。しかし、ひとりの僕は「布に包んでしまっておきました」(20)と元金の1ムナを帰します。そればかりか、反対に自分のとった行為の責任はあなたにあると王に詰め寄ります。

結果、彼は命まで取り上げられてしまうわけです…。一体、ルカは何が語りたかったのでしょうか。

生きるということは果たして経験を積み重ねることでしょう。わたしたちは確かにさまざまな経験を日々積んでいるのは事実です。しかしながら、そのすべてをしっかりと受け止めているわけではないというのも事実なのです。厳密に言えば、すべてどころか大半はかたわらに置き去りにしながら生きているといっても過言ではないでしょう。さらに関心の持ち方次第では、ずいぶんと偏った受け止め方をしているものです。受け止める力も人によって千差万別でしょう。いずれにしてもすべてを受け止め切るはずもなく、丁寧に生きているつもりでも、実はお互い無造作な生き方をしているものなのです。偏ることなく生きることなど望むべくもありません。いわば「与え」と「取り上げ」のはざまを常に偏りつつ右往左往しながら生きているに過ぎないのです。

真っ直ぐに生きるとは、信仰的に生きるとは、心に定めたことを貫き通すことではありません。偏る自らの心の現実を見つめること、ここに自分自身の脆弱と卑小が見出されてゆくのでしょう。ルカは「与えと取り上げ」という反対の事柄を提案しつつ、信仰の核心とは、そのはざまにあって、あなたは自分を捨てているかと問うのです。